
少しだけ、やさしい世界へ

jasper

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少しだけ、やさしい世界へ

【Nコード】

N9251N

【作者名】

j a s p e r

【あらすじ】

この世界は苦しくて

この世界は辛くて

この世界は痛くて

この世界は意地悪で

どうしようもなく嫌な世界だけど。

だけど、少しでもこの世界に優しさがあるならば――

それを、守っていききたいと思う。

前書き。

前書き。

メインとしている小説を、まったく更新していなくて申し訳ないばかりです。

先のシナリオに詰まった挙句、実生活も忙しくて思いついた話も次の瞬間には忘れ。

気づけばこんな期間が……。

終いには全く別のお話が思い浮かんで執筆する始末。

向こうもなかなか書けないし、期間も開きすぎだから、これを晒してしまおう。

と、いうことで投稿します。

以下、この作品に関する注意事項？ です。

- ・多重クロスあります。
- ・オリ主です。
- ・オリジナル設定ありあります。
- ・凄じ展開するかもです。
- ・この作品は一回の更新を10kb以上と決めているので、遅くなりがちです。
- ・結構しっかり煮詰めて設定を決めているつもりですが、矛盾するかもです。
- ・報われないユーノとクロノに栄光を、です。

- ・オリ主…無双できません。
- ・…あとなんだっけ。思いついたら書き足します。

第一話。

窓を開け、夜風を浴びていると。青い光を放つ流れ星がいくつも落ちていくのを見た。

これが恐らく、ロストログア・ジュエルシード。

『魔法少女リリカルなのは』の始まりだ。俺は…どうしたらいいんだろう。

——嘘だ。悩んでなど居ない。どうせやることなんて決まってる。

この苦しくて、悲しくて、痛くて、どうにもならない嫌な世界で、出来ることあるなら俺はやる。

思い出の無い前世だって、記憶の無い現世だって俺という本質は変わらないから。

「この世界に、『やさしさ』を」

……とりあえず、明日も学校だし弁当の下ごしらえだけして寝ようか。

トントントン、と小気味いい音が響く。

この音で目覚められたらとても気分のいい朝なんだろうけど、生憎この音を立ててるのは自分自身。

玉子焼きに入れるネギを刻んでるわけだ。

両親も居ない、戸籍も見当たらない、記憶も無い俺。

当然住む場所は無くて、存在の証明も出来ず途方にくれることになる。

そこで、偶然出会った李小狼さんりしょうらんが李家が資本元だというマンションを一室貸してくれた上

裏で手を回して戸籍も作ってくれた。本当に頭が上がらない。

理由を聞けば、

「そういう縁なんだろう」

との一言。

そしてこの人物、ただの偶然ではなく本当にあの『カードキャプターさくら』の人物だ。

主人公たる木之本桜さんも小狼さんと同棲しているし、カードも存在していた。

ある事件によってこの二人からは魔法を公開されたんだけど、そこは省略しておく。

ここは変に混ざった世界ということのようだ。そういうことにしておこう。

そして俺はこの部屋で一人暮らしをしているわけだ。

通わせてもらってる学校は弁当持参だから自分で用意しなきゃならない。よって先刻に戻る。

ちなみにこの学校、聖祥大学付属小学校というのだが私立だ。

公立でいいと話したら「私立のほうがいろいろ融通が利く」と突

っぱねられてしまった。

正直な話をすれば成人の前世の知識を持っているだけあって、公立校よりはなかなか楽しめている。

「…ちよつと薄いかな？」

朝食用に豆腐となめこの味噌汁を作ったわけだが、豆腐の水切りが甘かったようで若干薄まった。

しかしここから味噌を足せば変に豆腐に味が染み付きそうで嫌だ。しょうがないから諦める。

う、弁当の彩りが悪い。しかたない、プチトマトで誤魔化そう。

とか出来ているのは前世の知識のお陰だろう。

俺は朝飯を食うから、その間に読者の皆様へ俺についての説明がされるだろう。

俺の名前は柚木宗一。ゆずきそういち現在は聖祥大付属小の六年生。

前世は同姓同名の二十一歳。

前世はエピソード記憶がなく、知識だけが持ち越された状態。

現世は目覚めた一ヶ月前以前の記憶がなく現在の自我だけが存在の証明。

とりあえず、ある能力つきの転生者だってことと、ここが前世のいう物語の世界だって言うのが要点だろうか。

食事終了。説明も中断。

さくさくと学校に行こうか。

聖祥はスクールバスが出ている。
そこまで遠いって訳でもないから俺はあえて自転車を使わせてもら
ってる。

私立のせいか申請さえすれば基本自由だってんだから凄い。
途中でコンビニに寄り昼食用の茶を買って学校へ。

「おはよう」

「うっす、柚木」

前の席の篠崎。まあ、ただのクラスメイトで何の秘密があるわけ
もない。

強いて言うなら授業全寝で成績は上限いっぱいという気色悪いく
らの天才野郎だ。

「つーことでおやすみ」

「はいはい」と

俺も寝るわけだが。

昼休みを告げるチャイムが鳴る。

俺がいつも弁当を食うのは屋上。屋上自体には人はそこそ居るん
だが、さらにその上。

進入禁止の柵を越えて、給水塔のはしごを上る。無駄な労力だがそれに見合うだけの景色があるんだよ。

自分で作った弁当を誰に見せるでもなくがつついてペットボトル片手に一服。

ふと眼下に視線を下ろせばこの物語の主人公が。友人たちとじゃれ付いているように楽しそうだ。

「何か用？」

気づけば三人がこちらに視線を向けていた。

俺の視線に気づいたんだろうか。偶然なんだろうか。前者ならびっくりだ。

「楽しそうだなんて。それだけ」

「そう」

ブロンドの勝気そうな少女——おそらく、アリサ・バニングスは興味を失ったのか視線をはずした。

しかし、もう一人のご令嬢——こちらもおそらくだが、月村すずかは逆に不思議そうに首を傾げた。

「そこって、立ち入り禁止じゃ…？」

「あつ、そうだよ！ あつちに柵があつたはずだよ！」

その疑問に乗ってくる高町。
ばれたら仕方ないと飛び降りることにする。

ちなみにこの給水塔、塔と名づけるだけあって、タンクと高さを合わせて3、4メートルくらいの高さはある。
そこを飛び降りるということは。

「きゃあっ！？」

「危ない！」

「——っ！」

と、いうこと。

しかし残念ながら危なくない。着地の瞬間に地面と反発力を発生させ、衝撃を緩和。無傷で着地。

落下速度も考えたので不自然には見えないはずだ。ただうまく着地したようにしか見えないだろう。

ここで一人。不思議な人物が居た。

驚きと警告を発した高町とバニングス。対して、俺を受け止めようとしたのか駆け出した月村。

驚くべき速度——前世の知識からすれば別に驚かないが——で俺のもとまで駆け出ていた。

しかし俺は何の苦もなく着地してしまっただけで。

要は、だ。俺を助けようと全力で掛けてきた月村が俺に突っ込んできた。

「うわっ!?!」

「きゃっ」

反射的に月村を抱きしめる俺。

いくら小学生とはいえ体格的には俺のほうがデカイ。俺の体が下になるように咄嗟に調整し、背中を盛大に打ちつけた。

さらに勢いのまま軽く二回体が跳ね、給水塔の壁に後頭部を強打した。

…痛い。とんでもなく痛い。「ぐう…」と思わず口から苦悶の唸りが勝手に出るくらい痛い。

「あ、あのっ、ごめんなさい!」

あまりの衝撃に視界は真っ白。耳は聞こえるがそれ以外はパーだ。

「えとっ、えと…」なんて慌ててる月村を離してやりたいが神経信号は腕まで到達しない。

傍から見れば困惑する月村を抱きしめているように見えるだろう。

「あんたはいつまですずかを抱きしめてんのよ!」

と、いうことで激昂なされたご友人様に額を何かで強打され、蓄積ダメージと共に俺の意識を葬りましたとさ。

S i d e S u z u k a T s u k i m u r a

「もう、二人たら……」

いつものようにお友達のアリサちゃんとなのはちゃんと三人で屋上でお昼ごはん。

授業で触れた未来の自分について、お話しているとのはちゃんが「自分には何も無い」といいました。

私はそんなことはないと思うし、アリサちゃんは余計に反応してしまったみたいでなのはちゃんに掴みかかります。

二人ともわかって楽しそうにじゃれあっているから、私も止めずに見ていました。

そのとき、私たちに向けられた視線に気づきました。

私はある事情で普通の人よりも感覚が敏感だから気づいたんですが、アリサちゃんとなのはちゃんも気づいたみたいです。

アリサちゃんは私と同じようにお金持ちの家だから、悪意のある視線には敏感みたいだけど……

なのはちゃんは どうして気づいたのかわかりません。やっぱりお兄さんたちが武術家だからなのかな？

それにしても、視線には悪意は感じられないからその理論だとアリサちゃんも気づかないはずなんだけどなあ…。

「何か用？」

アリサちゃんが視線の主——給水塔の上に座る男の子に話しかけます。

でも、あの男の子は上級生みたいだし…その言い方は良くないんじゃないかなあ？

「楽しそうだなんて。それだけ」

「そう」

一瞬驚いたような表情をしたあと、優しそうな微笑を浮かべてそういった男の子。

アリサちゃんはそっけなく返して興味を無くしたみたいだけど……男の子の微笑が寂しそうに見えたのは私の錯覚？

ふと、そんな疑問とは別の疑問が浮かび上がる。

男の子の居る場所は給水タンクの上。

つまりこの給水塔の裏側にある梯子を上ったんだと思うけど…そっち側は柵がついてなくて危ないから進入禁止のはず。

じゃあ…？

「そこって、立ち入り禁止じゃ…？」

「あつ、そうだよ！ あつちに柵があったはずだよ！」

思わず口から出てしまった疑問になのはちゃんが同意する。やっぱりそうだ。そういえば進入禁止の柵が付いていたはず。

私たちに言われたせいか男の子はお弁当などの荷物を纏めて飛び降りてしまう。

男の子が飛び降りた場所は私たちの居る場所と比べたら地上と二階くらいの高さがある。

うまくいけば怪我もしないけど、その下はただのコンクリート。

「きゃあっ!?!」

「危ない!」

「――っ!」

なのはちゃんが悲鳴を上げて、アリサちゃんが警告する。

その声を聞いて周りから視線が集まっているけど、私の体はもう動いていた。

私の身体は普通の人とはちょっと違う。強い力を出せるし、速く動ける。

男の子のところまでは十歩もない。ギリギリ追いつける!

そう思って駆け出したら、男の子は簡単に、それも綺麗に着地してしまいました。

私はそれを見たからって駆け出した動きを急に止められるはずもなく――

「うわっ!?!」

「きゃっ」

ぶつかってしまいました。

しかも男の子に庇うように抱き留められ、私の下敷きになってしまいました。

「あ、あのっ、ごめんなさい！」

私は直ぐに起き上がろうとするけど、男の子が抱きしめる腕のお陰で動けません。

痛みを堪えるような声を上げる男の子。

背中と頭をぶつけたみたいで、視線のピントが目の前にいる私に合っていないことから相当痛いみたい。

腕のほうまで意識が言っていないみたいなので、しょうがないのかな…と思うけど…

やっぱり、恥ずかしいかな。

少し、顔に熱が上るのが分かります。

でも…少し、安心できるような…。なにか、私の体の中まで暖かくなるような気分です。

「あんたはいつまでずかを抱きしめてんのよ!!」

と、アリサちゃんの声で我に戻りました。
でも、気づけば振り下ろされるアリサちゃんの拳。それは男の子の額にまっすぐ向かって。

「がっ!？」

急に男の子の腕から力が抜け、腕だけでなく全身から力が抜けたようにがくりと首も倒れました。

「アリサちゃん!？」

「大丈夫っ、すずか？」

「私は大丈夫だけどこの人気を失っちゃったみたい!」

「そんなに強く殴ってないわよ!？」

と、いうことはアリサちゃんが殴る前から気絶寸前だったんでしよ
うか？

私の頭の中でぐるぐるといろうんな考えがめぐります。

「そんなことより保健室だよ!」

「それもそうねっ。なのは、先生呼んできて!」

なのはちゃんが言ったことで、やらなきゃならないことに気づきました。

頭を強くぶつけてるみたいだし酷かったら病院に連れて行かなきゃ！

そこに、気の抜けるような男の子の声が聞こえました。

「はーい、どいたどいたー。お、柚木見事に気絶してんねー」

「あんたなによ！」

「こいつのクラスメイト。いいジャブだったよー？ こいつは俺が連れてくからメシ食ってなあー」

眠そうな目をした男の子が、気絶した男の子——柚木くんって名前みたい——を担いで行ってしまうました。思わずぽかんとしてしまう私たち。

見ていた誰かが興味を失ってご飯を再開した音で私たちも再び動き出しました。

「アリサちゃん。直ぐに暴力はいけないんだよ？」

「な、なによっ！ あいつがすすかを離さないから…」

「あとで謝りに行こう？」

「だって」

「ね？」

「…分かったわよ」

ぶすっ、とするけどアリサちゃんが心配そうに屋上の入り口のほうをちらちら見てるのは気づいてるんだ。

アリサちゃんって不器用だけど凄く優しいもんね。

「けど、どうしてあんなことになったのかな？」

なのはちゃんの言葉に、どう答えていいかわからなくなりました。さきほどからなのはちゃんの言葉は的確すぎるような気がします。あの男の子…落ちていく瞬間、ちよっとだけゆっくりになった気がするんだけど……気のせいかな？

とにかく、あとで謝りに行かなきゃ！

第一話。(後書き)

と、言うわけで始まりました。『少しでも、やさしい世界へ』
今回は、設定をちゃんと作りこむことと、各キャラクターの心理描写に意識を向けて書いてみようと思っています。

ちなみに篠崎君はただのモブです。多分これきりです。たぶん。

次回更新はまだまだ未定。

誤字脱字報告、意見、指摘、採点、感想。とっても待ってます。
ぜひ管理人の実力向上のためにご意見をっ！

第二話。

「…知らないて…やめた」

目が覚め、最初に気づいたのは消毒液の匂い。
数秒の思考の後、気絶して保健室に運び込まれたと結論した。
なんとも情けない。

「五体満足、五感も万全。意識もしっかり、記憶の欠落なし」と

身体を起こす。

物音と声に気づいたようで保険医が顔を出す。
ひらひらと手を振ることで無事を主張。

「それだけ元気なら大丈夫そうね。女の子が三人様子を見に来てたわよ？ 習い事があるからってさっき帰っちゃったけど」

「不慮の事故ってヤツです。気にしないでください」

「『不慮の事故』なんて難しい言葉よく使えるわね…。まあいいわ。
授業も全部終わっちゃったし帰る準備をなさい？」

それとも、ご両親呼ぶ？」

「問題ないっす。だいたい呼んでも居ないんで」

そう。とあまり深く突っ込まずに書類に書き込む保険医。
まあ、名前とクラス、状態を書いているだけだ。

礼を言って保健室を後にする。

俺を担ぎこんだらしい篠崎にはあとで礼を言うておこう。

帰り道。買い物する必要も無いのでまっすぐ家に帰るだけだが、考え事をしながら帰るとどうしても進みが遅くなる。

内容はやはり、今夜の動き。

どうするのが最適なんだろうか。何が最良なんだろうか。
首を突っ込むのも一つの選択肢だけど、俺に大層な力があるわけじゃない。

でも、世界っていうのは生易しくなんか出来ちゃいない。
物語のように幼い子供が自分たちだけでどうにかできるようになんて出来てないんだ。
だけど、俺にはどうにもできない。

「……頭、下げに行くか」

俺の選択肢は一つしかなかった。

S i d e Y u n o S c r y a

今回発掘した遺跡で発見した遺失物。ロストログア 名称はジュエルシード。
ジャンルとしては願望器に分類されるもので21個で構成され、宝
石のような形状をしている。

詳細を調べるには設備も足り無すぎるし、とりあえずはと管理局に
連絡を入れた。

しかし、受け入れはしてくれるものの手が足りないから自分たちで

持ってきてくれという。

管理局が万年人手不足というのは聞いていたから仕方ないとは思いますが、それで良いのかなとも思う。

遺跡の発掘もまだ中途半端だし、ジュエルシードを発掘した区域の責任者は僕だったから僕が本局まで輸送することにした。

航行ルートは殆どが魔法技術の無い世界か無人世界だし、危険も少ない。

次元航行自体は殆どオートモードで難しくないからみんなの手を煩わせないように一人でもっていくことにした。

「それが裏目に出るなんて!!」

何者かの襲撃。

エンジンがやられて航行不能。

すぐに仲間と管理局へSOSを発信する。

とにかく保管庫のジュエルシードの安全を確保しなきゃ!

それから保管庫へ走る。

蹴りあけるように扉を開けると宙に浮くジュエルシードの保管ケースと輝く魔法陣。

——あの魔法陣は転移の術式だ。

そう判断した僕はすぐに転移妨害の術式を組み上げる。

「くっ…強い……!!」

相手の実力が桁違いだ。僕の魔力量じゃ比にならないほどの魔力も持ってる。

妨害の術が次々に破壊されて転送されそうになる。

それでも即座に新しい術式を作り出して妨害をやめない。

そのとき、保管庫の真下で爆発が起こる。

煽られて両方の術が消える。

ジュエルシードは!?

そう思ったときには既に遅かった。

保管庫にあいた穴から航行艦の外へ。慌てて僕も後を追う。

このとき、もしかしたら次元空間に流されていたかもしれないとかバリアジャケットが無かったら即死していたとか考えてなかった。ケースが破壊されて散り散りになりそうなジュエルシードを何とか一まとめにする。

あと一歩で手が届くというところで再度後方で爆発。

煽られた僕はついにジュエルシードを掴むことは出来なかった。

「く、そ…」

落ちていった世界へと転移魔法を組んで追いかける。

確かその世界は、非魔法技術の世界。

必ず集めきれなきやと思ったところで一度気を失った。

次に目が覚めたのはどこかの林道。

かすかに感じるジュエルシードの反応にちゃんと追いかけられたと一安心する。

直ぐに立ち上がって一番手近なジュエルシードの反応へと歩いていく。

「レイジングハート。手伝ってくれる？」

＜了解です。可能な限り手を貸しましょう＞

「ありがとう」

首に掛けている赤い宝玉形の魔導端末^{デバイス}、レイジングハートに声をかける。

レイジングハートは僕がある遺跡で発掘したデバイスで、凄く高性能であることは分かってるんだけど

僕自身がデバイスとあまり適正が合わないからうまく使ってあげることが出来ない。

それでも力押しな部分が多い封印術式なんかを使うときは、力場解析を補助してくれたりと力を貸してくれる。

いつか、ちゃんとした使い手に合わせてあげたいと思う。

「…見つけたっ」

一っ目。

これはまだ発動寸前だった。

転送の妨害、ジュエルシードの拡散防止、自分の転移とただでも多
くない魔力を使い果たしているけど、やらない言い訳にはならない。
レイジングハートに補助してもらいながら封印術式を発動する。

「ジュエルシード、シリアルXIII：封印！」

思ったより簡単に封印することが出来た。

多分発動前だったからだろう。それにしても、使用魔力量が多い。
僕の身に余る行動だ。

だからといってまったく関係ない人に危害を加える可能性を考えたら僕が動かざるを得ない。

だとしても、魔力がもう限界だ。

<Master!!>

警告。

背筋に走った悪寒に、咄嗟に前方へ飛び込む。

直後、元居た場所を黒い何かが通り抜けた。

立ち上がって状況を把握。

攻撃してきた何かはジュエルシードの思念体だった。

僕の魔力に反応してきたのか、発動しかけだったジュエルシードに
反応してきたのか。

どっちでも良いけど問題はもう僕の魔力がすずめの涙もびっくりと

いうくらいにしかないこと。

僕は魔力量も多くないくせに回復速度もなかなか遅いんだから泣けてくる。

状況は最悪。

それでも！！

「レイジングハート！」

<Seeling>

ミッドチルダ式の魔法陣が現れ、そこから延びる僕の魔力光をした光の帯が思念体を絡めとる。

けれど、やはり魔力が足りない。自身に施した封印術式も無駄に魔力を食っている気がする。

僕の意味とは関係なくひざが崩れ、思念体の雄たけびと共に帯が破壊される。

その余波は僕を襲う。普段なら耐え切れるだけのたったそれだけの余波で僕の意識は刈り取られかけた。

レイジングハートがバリアバーストでどうにか反撃してくれたのだけは分かる。

どうにもならず倒れこみ、思念体がどこかへ逃げていくのを見た。

何かあったときのためにレイジングハートに自動設定しておいた変身魔法が発動し、フェレットの姿になる。

フェレットの状態のほうが基本的なエネルギー消費が少ない。

回復までの速度も多少だけど早めることができるから。

そして、意識を失いかけながら通常なら絶対にやらないことをした。
そう……この魔法の無い世界の誰かに、助けを求めることを。

<誰か…誰か助けて……力を貸して…魔法の……力、を………>

S i d e o u t.

S i d e N a n o h a T a k a m a c h i

<誰か…助けて…:>

「え？」

学校が終わり、塾へ向かうときのことです。

誰かの声が聞こえました。

一緒に居たアリサちゃんとすずかちゃんに聞いても聞こえなかった
といいます。

でも、今…確かに…。

<誰か…:>

絶対に聞こえました。

直ぐに声のほうへ走り出します。

アリサちゃんとすずかちゃんが私を呼ぶけど、助けを求める誰かが
居るのに止まれません。

そして走っていると、その場所は昨夜見た夢の場所とよく似ている
ことに気がつきました。

夢の中では黒いお化けと男の子が戦っていたけど……。

「あっ」

見つけたのは、小さな動物さんでした。
たしか…フェレットだったかな？

「あなたが…私を呼んだの？」

抱き上げるとまだ、暖かいです。
でも怪我をして弱っているみたい。

アリサちゃんとすずかちゃんが追いついてきました。

「何で急に走り出すのよっ」

「アリサちゃん！ すずかちゃん！ この子！」

「…フェレット、かしら。怪我してるわね」

「この辺に動物病院は…」

「私、知ってるよっ」

「すずかつ、案内して！　なのははその子を揺らさないように抱い

てくること！」

「うんっ」

すずかちゃんの後を追いかけて動物病院に向かいます。

その後、フェレットさんを病院に預けて私たちは塾に向かいました。
あのフェレットさん、私を見ていたみたいだけど…なんだったのか
なあ？

その夜。

フェレットさんをうちで預かってあげたいとお願いしたら、お父さんとお母さんはあっさりとお케이してくれました。
ダメって言われると思っていたから少しびっくりです。

さっそく、二人にメールしなきゃ。

<——く、なんで僕のところ——>

え？

また、声が聞こえました。

<誰か——>

この声は――！

そう思い立った瞬間、携帯を投げ捨て家から飛び出しました。

<誰か――の力を！ 力を貸して！！>

あのフェレットさんのところへ！！ 急がないと！

あまり運動は得意じゃないけど、一生懸命走ります。
そうしないと後悔するから。私は出来ることをやりたい！

辿り着いた動物病院。

タイミングを合わせたように突然病院の壁が爆発しました。
飛び出してくるフェレットさんと何かよく分からない黒いおぼけ。

「まさか、本当に――走って！！」

「ふえ、ええええっ!？」

黒いお化けがこちらを見たのでフェレットさんに言われたとおり走り出しました。

走るだけでも結構大変なんです、フェレットさんにお話を聞くことにします。

「これって、どういうこと!？」

「すみませんっ。まさか本当に魔力を持つ人が居たなんて…それもキミみたいな——」

「謝らなくて良いから説明して〜!」

「はいっ。あれはジュエルシードの思念体というもので、止めるには魔法の力が必要なんです!」

「魔法!？」

「それでこの——危ない!!」

「きゃあ!!」

いつの間にか黒いおばけに追いつかれていて、振り下ろされた長い腕の衝撃で私は転んでしまいました。

迫ってくるおばけ。私にはもう、どうすることも出来なくて。

フェレットさんの声に答えることも出来ず。

ただ、死んでしまうことが怖くて目を瞑ることしか出来ませんでした。

『風華——招来!』

突然私を包み込んだ優しい風に、目を開きました。

風の壁に邪魔されるみたいにな、おぼけは進めません。

こつこつ、と私の後ろから誰かが歩いてきます。

それはお兄ちゃんくらいの年ごろの、男の人でした。

「宗一が言っていたのはこういうことか」

テレビで見た神社の人が使うお札のようなものを一枚手にしながら男の人はこちらへと歩いてきます。

「大丈夫か？」

「えと、はい。大丈夫です」

「思ったよりあれは手強そうだな。今の装備なら流石に儀式レベルの術が必要か？」

風の壁に何度もぶつかってくるおぼけに男の人は、顎に手を当てて考え始めました。

そこに、私の腕の中のフェレットさんが動き出しました。

「その、あなたは？」

「ん？ 今のは…お前か。…なんとなくケルベロスを思い出してムカつく気がする」

「あなたは…この世界の魔導師ですか？」

「魔導師、という言葉がまず初耳なんだが…まあ、魔法を使う者、という意味ではその通りだな」

「この世界に魔法技術があつたなんて…」

「そういうお前は、異世界の魔法使いということでもいいのか？」

「…次元世界のことを？」

「ある人に言わせれば——世界は、それを知るものの前にはひとつではない。らしいからな」

風の壁がだんだん弱まってくると、男の人は新しくお札を出して人差し指と中指の間に挟みます。

『水龍招来』という短い言葉の直後、目の前には大きな水の竜さんすいりゅうが出てきてお化けをばらばらにしてしまいました。

「再生もするのか」

「あの、封印の術はこの世界にはないんですかっ？」

「ないことは無いが、俺の力だとある程度道具が必要になるな。今の状態だと数十分かかる儀式術しか無い。

こんなことなら桜も連れて来ればよかったか」

「この子につ、手伝ってもらえば可能です！」

「…そうなのか？」

男の人はフェレットさんと目を合わせた後、私のほうに顔を向けます。

その目はとっても強くて、とっても怖い。

瞳の奥に、何かを灯した……そう、お父さんやお兄ちゃんみたいな目。とても強い人の目でした。

「立ち向かう勇氣は？」

「——大丈夫です！」

「…絶対、大丈夫だよ。か…」

何故、私は頭をよぎった「はい」でも「頑張ります！」でもなく、「大丈夫」という言葉を使っただろう。

よくわからないけど、男の人は優しく、でも凄く頼れるような笑みを浮かべておぼけのほうを向きました。

また、何枚かのお札を取り出して言います。

「足止めはする。人避けの結界は張ってあるし、多少時間がかかってもいいから落ち着いてやってくれ」

「はいっ」

「僕の言葉を繰り返してください！」

フェレットさんから赤い宝石を受け取ります。
なんだろう…とても、暖かい。掌の上の宝石も、私の胸の奥も。
私は、頑張れる。私にも出来ることがある！

「我、使命を受けし者なり」

『我、使命を受けし者なり』

「契約のもと、その力を解き放て」

『契約のもと、その力を解き放て』

「風は空に、星は天に」

『風は空に、星は天に』

「そして――」

――不屈の心はこの胸に。

『この手に魔法を』

<Stand by ready.>

「レイジングハート、セットアップ!」

<Setup.>

Side out.

Side Yuno Scrya

現地の魔導師——正確には魔導師ではないみたいだけど——の男性の協力もあり、
ジュエルシードの思念体は女の子の使うレイジングハートに封印される。

男性の実力は凄いものがあって、僕たちにまったく思念体の攻撃を通さなかった。

そのお陰で女の子もあまり慌てることもなく指示に従ってくれて、

一発でのデバイス起動、封印を成功させてくれたんだと思う。

ただ、管理局も未確認の魔法技術、それも管理外世界の住人に遭遇してしまったのは拙いかもしれない。

しかも、現地の魔法技術にすら触れたことも無かったような女の子にまで手伝わせて。

厄介ごと、それも世界危機レベルの災害を持ち込んだことに、危険に巻き込んだことに少くない罪悪感を感じる。

二人には丁寧の説明したあとに謝罪をしなきゃならない。

でも、僕は、女の子の才能に感動した。

インテリジェントデバイスの中でも気難しいレイジングハートを一発で起動させるだけの魔力量と相性。

触れたことも無い魔法でミスもなくジュエルシードというロストロギアを捕獲したセンス。

そして……僕は、本当はダメなんだろうけど、あり得ないんだろうけど…。

レイジングハートに、真の使い手に出会わせてあげられたことに喜びも感じていたんだ。

S
i
d
e

o
u
t.

第二話。(後書き)

二話目にして主人公が空気の罨。
そして魔改造パート1。ユーノ。
ちょっと大人っぽいかな。

ユーノは凄いことになる予定です。多分将来ユーノ無双です。

小狼とか絡んでくるのは…まあ、無印だけかな。

無印過ぎたら主人公も多少強くなるはずなのでサブキャラたる方々
はフェードアウトする予定です。

それまではサポートキャラ。

さて、次回は主人公が頑張ってくれるはず。あの『彼女』と。

第三話。

「小狼さん」

「無事に終わった」

「そうですか」

高町家から少し離れたところで、小狼さんに合流する。

俺も結局気になって離れたところから見ていたし、小狼さんがいなければ、本当に危険だったかもしれない。
その思いを込めて頭を下げた。

「ありがとうございました」

「いや、大したことはしてないさ。とりあえず、詳しい話は明日と
いうことにした」

「…これからもよろしくお願いします」

「それは構わないけどな……お前は——」

そう言われて、小狼さんが家へと進めていた足を止めた。
二歩ほど先に進めてしまったので振り返る。

「自分で、どうにかしたいんだろう？」

「…現実はその甘くありませんよ。周りにより適任者がいるならそうすべきです」

「お前は放棄してるだけだ」

その言葉にむっとする。

そして、自分の行動に驚く。要は凶星だってことだから。

「出来なくても、やってみる価値はある。俺だって今でも桜より弱い。それでも桜を守りたいと思ってる。

出来ないこととやらないことは違う。出来ることから、はじめる
といい」

「出来ないことと…やらないこと。俺に出来ること」

「ああ、こういうときはあれだ」

再び歩き出した小狼さんの横に並んで、歩き出す。
短いやり取りだったけど、たった今俺は変わった。

躊躇する必要は無かった。俺は俺が弱いことも知ってるし、世界が優しくないことも知ってる。

だったら強くなればいい。だったら少しでも優しさを増やせばいい。そのために俺は、歩き出そう。

歩き出した行き先を考えながら、小狼さんの言う言葉に気が付いた。きっと、これはあれだ。あの言葉だ。

「――絶対、大丈夫だよ」

翌日。

とりあえず小狼さんにはそれとなく高町・ユーノペアの補佐をしてもらうようお願いした。

突然俺が首を突っ込むのも不自然かつ説明が面倒だし、そこまで大々的に手伝えない。

その分小狼さんのほうが力もあるし安心できる。

今はまだ高町の家族には説明しないみただけ、説明するときにも李家の名前を出してもらったほうが

裏に通じてる親父さんには信用を得やすいだろう。

俺は俺として動くことにした。
魔法が使えなくても簡易の封印を使える札を小狼さんと桜さんに作ってもらった。

適当に出来ないか頼んでみたら朝には出来たという奇跡。

単純な力なら桜さんの力を込めたので強いらしいけど、小狼さんの
にはジュエルシードには術式の強度不足らしいので

封印したらその日のうちには正式な封印を施したいらしい。

つまり見つけたら直ぐに高町か小狼さんのところへってことだ。

「XⅡ5」

「正解だ」

結局は普通に学校に来てるわけですが。
だって小学生だもの。

つーか何で小学生なのに方程式とかやってんだろう。この学校。
普通の参考書でも中学生だと思ふよ。

だからといって何の苦勞もすることなく終了。
お昼休みなのでいつもの特等席へ。

「うまい」

自分で言うのもなんだけど。

今日のめにうは生姜焼き弁当。ちよつと手間をかけてチューブの生姜じゃなくて生の生姜をすって作ってみた。
ちよつと香りが強くて、なかなか美味。生姜焼きの肉はちよつと大
きめなのが好み。

「またそんなところにいるの？」

「おお、金髪お嬢」

「誰がよっ」

お前以外に誰がいる。と心の中で突っ込みつつ、荷物をまとめる。
あまり上から見下ろして話をするのは褒められたことじゃない。
今日もさくつと飛び降りてみたが、今度は騒がれることは無かった。

「よう、お嬢様方」

「うん。こんにちわ」

礼儀正しいのはもう一人のお嬢様。

三人が座って昼食をとっている横にどかりと座りこんでみる。

「自己紹介がまだだったわね。私はアリサ・バニングスよ」

「私は高町なのはです」

「月村すずかです。あの、昨日はごめんなさい」

「いや、気にするな。別に怪我もしてないし」

「私もごめんなさい」

おや、気の強そうなバニングス嬢まで頭を下げなされた。

なんのことやら……ああ、そーいえばそんなこともあったね。

魔法云々のインパクトに比べたら人と衝突した、人に殴られたなんて大した驚きも無いわけだし。

「いいつつの」

「それで……えっと……」

「あ、名前か？ 俺の名前は柚木宗一だ」

「柚木くん、は何処のクラスなの？」

「……あれ、どのクラスだっけ」

教室の位置は覚えてるけどクラス……なんだっけ。

「自分のクラス覚えてないなんてどういうことよ」

「まあ、一応最高学年だったことだけ言っておくか」

「って！ あんた六年生だったの?!」

「わー…先輩さんだったんだ」

「たかが小学生に先輩どうこうも無いと思うけど」

少々大げさに驚くバニングス嬢と、ほえーと若干の憧憬のような視線を向けてくる高町。

なぜ貴女はニコニコと全てを知っていたかのような笑顔をしているのでしょうか、月村嬢。

不意に思い出したのでバッグからデザート代わりのゼリー飲料を取り出す。

自炊してるから栄養が偏ってることは無いと思うけど、なんかこういうのでビタミンとかとっという方がいいかと思う。

まあ、日本人らしい気持ちの問題なんだろうけど。

「あれ、宗一くん。お昼ごはん、それ？ お弁当わけてあげようか？」

「いんやもう食っただけ。これはデザート」

「さすが男の子」

なにが？

大体高町。その手のひらサイズ弁当の何を分けると？

どうでもいい話だけど俺はなかなか燃費が悪い。

別に凄い筋肉があるわけでも太っているわけでもないのにやたらと食う。

小学生にして馬鹿でかい二段弁当を食っているのも俺くらいだろう。こいつらの弁当は俺の弁当の一段分。その半分から三分の二程度か？小学生の女の子ってこんなものなんだろうか。

「宗一くんっていつもあそこで食べてるの？」

「そうだな」

「じゃあ、明日は一緒に食べようね」

「は？」

「いいから私たちが来るまで待つてなさい。アンタのほうが後だったら待つてあげるから」

「いやいやいや、どの流れでそうなる」

「一緒に食べよう？　ね？」

「ほら、珍しくすずかまで誘ってるんだからおとなしく一緒に食べなさい」

「だからどうして——」

この美少女三人に誘われて、なぜ即答で了承しない。という空気が
：『屋上全体』から流れ始める。

なぜ、何が起きたらこんな化学反応が発生する。

たまたま見つかる。ぶつかる。翌日すこしお話。じゃあ明日から昼
食を一緒に。

……うん。整理してもおかしい。なにがどうしてこうなった。

残念ながら俺は絶賛NOといえない日本人なのでこの空気に首を縦
に振るしかなかったんだけど。

で、放課後。

高町は神社で二回目のジュエルシード戦があるんだろうけど、ジュ
エルシードの発動に気づいたら

小狼さんに連絡することになってるらしいから大丈夫だろう。

問題は、だ。

「なんで俺はジュエルシードに襲われてんだ？」

何故か俺と睨めっこしてなさるジュエルシードinカラス。多分カ
ラス。

なんかやたらと鋭いくちばしと一メートル台の大きさを持ったこの
黒いお方は俺を凝視してらっしゃる。

ここで問題に一つ気づく。

「俺結界張れねえ…！」

ということだ脱兎。

こんな住宅街のど真ん中で相手なんか出来ない。

今はたまたま誰も居なかったみたいだけど、見つかったら面倒なので走る。

いい感じに俺に目を付けたカラス様は俺を追ってきてくれる。

「どこか人目の無い場所は…：…っとお！？」

きよろきよろしながら走ってたら突撃された。

ぎりぎりで避ける。けどなぜか顔に痛みが走る。

再び走りながら顔に手を当てたら血が付いていた。よく見れば服にも切り傷。

どうやらかまいたちでも発生させてるみたいです。やばいので全力で走ります。

そして俺が目をつけたのは地上10階程度と見えるマンション。

周りに同じくらいの大きさのマンションは無いから屋上なら多分大丈夫…！！

下手に何処かの空き地よりマシ。

「せーえ、のっ」

窓の少ない路地側から、地面を踏み切る。

壁に足を付けて……走る！！

落ちないと分かってても地面を背にして垂直に走るのはなかなか怖い。普段やろうとも思わないし。

しかも重力に反するように走ってるわけだから、地上を走るよりも遅くなる。

つまり元より空を飛んでるカラスさんのほうに利があるわけで。

「おおおおおおおおおおおっ！！？」

声を殺しつつ悲鳴を上げて走ってます。限界です。目玉飛び出ます。鼻水出そうです。

着地。

これからやっと戦える。

崩れに崩れた呼吸を整えながら、カラスと対峙。

カラスは元々頭のいい生き物だから俺が臨戦態勢を取ったのが分かったようで、少々警戒している様。

まずは手始めに。

「——らあ！」

ピッチャーよろしくそれを投げる。

俺の手から一直線に伸びた『雷撃』をカラスは驚きの俊敏さで避ける。

…あの身体でドンだけ小回り利くんだよ。

ああ、前からやたらと多用してる俺の能力だが、あれだ。

某超能力者^{レベル5}の第三位。超電磁砲^{レールガン}と呼ばれる電撃使い^{エレクトロマスター}の最高峰の能力。

これを応用して電磁力を働かせて壁走ったり、飛び降りて着地の瞬間に軽く反発させたりしてるわけ。

神経パルスを操って可能な限り加速することで反射神経を跳ね上げたり、筋肉に微小電流流してドーピングもどきしたり

小学生の身体能力を凌駕した動きが出来る。その分疲れるし、筋肉痛や頭痛とかのアフターリスクもそれなりだけど。

バカみたいな速さで突撃をしてきたカラスをスウェーバックで何とか回避。

逆に鼻先数センチを飛んでいくカラスの腹の部分に手を触れて放電。バチィ！ と音を立ててカラスが吹っ飛ぶ。

「はぁ、はぁ……俺弱っ」

そんなことを呟きながら、突撃しかないカラスの追撃を受ける。

さっきの攻撃もそこそこ効いてるみたいだけど、まだまだらしい。

上空に向けてなら、周りに被害も出にくいだろう。

二度の突撃を避けて、カラスが離れたタイミングでポケットからコインを取り出す。

避けられない速さで、避けられない威力で、避けられない規模で。

コインを真上に軽く弾いてカラスへとその手を突き出す。

コインが落下し、カラスと俺の射線に入った瞬間。

生成した電気をすべて電磁力に。コインに集めて……開放する。

俺の最大の攻撃『超電磁砲』。元の使用者に劣らないその攻撃は確かにカラスを捕らえた。

ぼろぼろになり落下してくるカラスを見ながら再びポケットに手を入れ、今度は一枚の札を取り出す。

「忌まわしきもの、悪しきもの、害なるものよ。今ここに、仮初の眠りを」

小狼さんたちに受け取った簡易の封印術。キーワードさえ口にすれば魔力を必要とせず、仮封印が出来る。

札が輝き、その輝きはカラスを包み込んだ。

光が収まれば力を封じられた青い宝石と普通のカラス。

カラスはまあ適当にその辺に放っておいて、ジュエルシードを掴む。

その瞬間、金色に輝く刃が俺の首に突き立てられた。

「そのジュエルシードを、渡してください」

俺の身体からは微弱な電磁波が出ていて、そのため動物にはびびられやすいし気を抜くと電子機器に異常をきたす。

意識すれば出力を上げて意図的に機械に影響させたり、電磁波の反射や吸収度で人やものの接近を感じ取れる。

さっきまでは全開だったんだけど……レールガンの発射で途切れたか、封印できて気が抜けたか。

まずはジュエルシールドをポケットに仕舞い、降参の意を込めて両手を上げた。

相手も俺に攻撃の意思なしと見たようで若干緊張感が緩む。

そのまま振り向いて襲撃者の面を拝んでやろうと思ったら――

――それは、黒の魔法少女だった。

第三話。(後書き)

頑張ってみる微妙に弱めの主人公君。

単純には既に人外レベルですがね。魔法的には微妙です。

さーて、感想より先に突っ込まれそうなこの流れ。

収拾が付かなくなる予感がしてきた……!!

第四話。

「まあ、待て。冷静に話をしよう」

「そのジュエルシードを渡してください」

あれ、おにーさんちよつとイラつとしたよ？

「交渉をしないかと言ってるんだが」

「渡してもらえなければ、攻撃します」

あれー？ おにーさんやっぱイラつとするなあ。

思わずさっきの疲労が吹き飛ぶくらいには。アドレナリンドパドパですよ。

言葉尻は丁寧だけど、明らかに喧嘩売ってるよね？ やっちゃっていいんだよね。男女平等に。

いや、冷静になれよ俺。

人の話を聞かないのは子供の特権。

俺がイラついてどうする。収拾が付かなくなるのが関の山だ。

「…………さて、どうするかな」

目の前の相手はやる気満々。

…というかその格好は目の毒というか保養というか。
とりあえず羞恥心を教えるべきだろうか。

そんなにヤワな封印術じゃないと思うんだけど、こんなところで戦
闘してこの子の魔力の余波で封印がとけたら元も子もない。
ということで渡してしまうことにする。

「ほい」

「えっ？」

ポケットから出したジュエルシードをぶん投げる。

黒い魔法少女——フェイト・テストロッサはわたわたとお手玉して
からキャッチした。

何をするんですかと言わんばかりのジト目を向けられる。

「それ、仮封印らしいからちゃんと封印したほうがいいぞ」

「そうなんですか？」

「らしい」

「：バルディッシュ」

<Yes, Sir>

改めて封印してから格納するテストロッサ。

素直だなおい。

知らない人の話を簡単に信じるんじゃないよ。

「それじゃ」

「あ、はい」

そして追っても来ない。

うーん。半端だな…。普通はジュエルシードと渡り合ってた時点で一般人とは判断しないし、

どこかにまだ隠し持ってる可能性も考えて逃がしはしないと思うけど。

そこら辺はまだ子供らしいって考えるべきなんだろうか。

「……………疲れた」

なんにせよ。俺の初陣とテストロッサとの邂逅は終わった。

疲れたから家に帰って寝る。

縁というのは不思議なものだ。

なんか知らないけど会いたくない人に会ったり、忘れたところに知り合いに会ったり。そういう経験はみんな少ないと思う。

どういう確立でこの出会いがあるだろう。

まさか翌朝にはテストロッサと再遭遇するとは。

「あ……」

「……はあ」

どうしようか。

正直な話、社会的常識な意味で高町は大丈夫だし、戦力的には小狼さんも居るし問題ない。

逆にテストロッサは戦力は問題ない反面、純粹すぎて問題だらけじゃないのか？

：まあ、俺もジュエルシードを相手取るには戦力不足は否めないし、丁度いいのかも。

そういう意味ではうまく世界に^{システム}乗せられてる感がひしひしと。

「ま、そういう縁なんだよな」

「えん……？」

「君はどうしてこんなところに居るのかな？」

「ジュエルシードを探して……」

「夜通しか？　よく補導されなかったな」

「…どうして？」

何で分かったって、そんな目にクマ作ってふらふら歩いてたら誰でもわかるだろう。

…ああっ、もうめんどくせえ！

「来いっ」

「…やめてください」

襟首を掴むようにして俺の部屋へ引っ張る。

抵抗するが全くもって意味は無い。力全然入ってない。

そんなになるまで探しても集中力落ちて見つかるものも見つからないし、肝心なときに何も出来なくなるぞ。

問答無用で意味も無い抵抗をするテストロッサを引きずって部屋へ。学校とか知るか。

「ベッド貸してやる。寝ろ」

「ジュエルシードを探さないと…」

「そんな寝不足で何が出来る？」

「それでも…急がないと…待ってるんだから…」

どうせ後で後悔するだろうけど、とりあえずその場のノリで乗り切れると信じる。

テストロッサを引きずり込んでベッドへ。無理矢理ベッドに寝かせて、添い寝して、とん、とん、と一定のリズムで背中を叩く。

赤ん坊を寝かしつけるのと同じ方法。

まあ、正常な人間ならむっとするだろう。

実際テストロッサもむっとしたわけだが、横になったことで倍増したらしい睡魔に敗北。

五分もしないうちに寝息を立て始めました。

「さて、と」

この子を置いて学校に行くわけにもいかない。っていうか出歩けない。

見た感じだと丸一日寝そうな感じもしないけど。

と、起こさないようにベッドから抜け出したところでフェイトの手の中の金色三角形の宝石に気が付く。

「バルディッシュ、だったか？」

<……>

「警戒するなよ。別にお前の主に対して何かしたいわけじゃない」

<…わかっています>

「ああ、出来たらこの子の家の人……いや、『アルフ』に連絡しておいてくれるか？」

<……どうしてその名を？>

おお、驚いてる驚いてる。

でも大きな声を上げないなんてなんて主思いだろうか。

「秘密。出来ればお前も秘密にな。騒がないように、ちゃんと陸路でくること前提で呼んでくれ」

<……了解>

さて、学校にもいなくなっただしやること無いな。

既に包丁を握ってる俺が居る。

ゲームもやらない、ネットもやらない。なんて人間が室内で趣味を持つのに読書か料理に走るのは割と必然じゃないだろうか。

いや限定はしないけど。他にも色々あるだろうし。

とりあえず覚えて損するもんじゃないしと思って覚えたのが料理。

師匠は小狼さん。

それでも家庭料理レベルならそこそこだと思ってるんだけどね。

で、暇があったら一回やってみたいと思ってたのはスープ系。コンソメスープとかポタージュとか一回ゼロから作ってみたいと思ってた。

丁度新じゃがあるし、やたら暇になったし、じゃがいものポタージュを作ってみようかと思う。

ちゃんと裏ごしとかもして頑張ってみる。……まずはレシピを探そう。

ひたすら皮を剥いたじゃがいもをふかして、ひたすら潰して。ひたすら裏ごし。

こういう作業は無口になるね。喋る相手もないけど。

いい加減腕が疲れてきたころ、チャイムが鳴った。

「はいはい」

ちゃっちゃとエプロンで手を拭いて玄関へ。

姐さん系な雰囲気を持つ女性——アルフと確定——を招き入れる。

相手はやたら睨み付けてくるけど勤めてスルー。

「あのお嬢さんのお姉さんかな。妹さんは俺の部屋でぐっすりだからご安心を」

「アンタが何もしてないことも、フェイトを寝かせてくれたことも

バルディッシュから聞いているよ。

……アンタ、何が目的だい？」

「不思議な縁を持った女の子がふらふら歩いてたから寝かせてただけ。世話になってる人から縁は大切にしろと言われてるからな」

「……嘘をつくんじゃないよ。アンタがジュエルシードを封印したって聞いているんだ。管理局の人間なのかっ」

「はいはい落ち着いて。妹さん起きるよ？ ……ちなみに後者についてはNOだ。大体俺は魔法使いじゃないしね」

「魔導師じゃないのに封印が……確かにアンタから魔力は感じないね……」

「色々物知りなんだと思ってくれ。世の中不思議がいっぱいだ」

落ち着いたようなので適当に冷蔵庫からジュースを取り出してコップに注ぐ。

アルフに渡して、俺はジャガイモの裏ごしを再開。

あとは生クリーム、牛乳、コンソメ、ブイヨンを入れて味を調整するだけだ。

「……料理かい？」

「一人暮らしなんでね。必須スキルなんだよ」

「親は？」

「気が付いたときから天涯孤独。ある人に協力してもらわなきゃ生きてる証明も出来なかった始末」

「……悪かったね。変なこと聞いて」

「別にー。昼飯何が食いたい？」

「肉……って作ってくれるのかい？」

「もち。適当に寛いでいいぞ。もの壊さなきゃ」

と、いうことで出来かけのポタージュをコトコト煮込んでる間に昼ごはんを作ろう。

……ところで使い魔って味付けどうしたらいいんだろ。人間寄り？
素体寄り？

とりあえずメニューはポークピカタにしました。

昼飯を食わせてやったらすっかりアルフにも気を許されました。心は胃袋の横にあるというのは案外嘘じゃないのか？

まあ、三大欲求だしな。一番本能に近い感情でもあるわけだ。

———ころそこ、餌付けとかいうな。

しかしまだまだお嬢様は起きてこない。

仕方ないから適当に菓子類を出してきてそれを摘みながらアルフと雑談でもすることにする。

「あの子…フェイトか？ あんなになるまで何に追い詰められてる？」

「母親の所為さ。あの鬼婆のためになってフェイトはいつも頑張ってるんだ。なのにもいつも…」

「なるほどね…で、メシとか食ってんの？ えらい軽かったけど」

「あんまり。——ってアンタフェイトに触れたね!？」

「別にいかかわしいことしてるんじゃないんだからそれくらい見逃せよ!？」

テストロッサー——フェイトを起こさないように声を抑えつつ、器用に声を荒げる俺たち。

お互いに冗談だってことは分かってる。

「メシくらい食えって言え。あと寝ろ。休まなきゃ肝心なときに動けないんだから」

「言っても聞いてくれないんだよ」

「じゃあ睡眠薬でも飲ませろ」

「アンタね…」というジト目はスルー。

時には強引な手段もありなのだよ。寝なきゃ心も壊れる。そういう検証もどっかでやってたはずだ。

さて、俺は大事なことを忘れていたようだ。

当然この時は気づいておらず、チャイムを鳴り、迎えた客がその事実を思い出させた。

この三人との約束を忘れればこういうことになるだろうことは、原作知識から知っていただろうに。

「は……?」

「アンタ、なに無断欠席なんてしてるのよ」

腰に手を当てて、私怒ってますと態度から主張するアリサ・バニングス。

実は一番恐怖を感じさせる微笑の月村すずか。

にやはは…と申し訳なさそうに眉を下げた高町なのは。

「いや、担任には連絡を…というかお前らが何故ここについていうかなんでお前らが俺の欠席をというか、はあ!？」

「にゃ、にやはは…やっぱり混乱するよね…」

「いいのよ。何より問題は約束した私たちにも連絡を入れずに休んだことっ」

少々横暴すぎる気もするが、まずはその約束をやっと思い出した。確かに俺は今日の昼食をこの三人と取る約束をさせられた。

まさかとは思うけど、約束したのに来なかったから俺の教室まで押しかけてさらに住所を聞き出したとか？

「どういう状況だこれ」

「今日のお昼ごはんのときに、宗一くんが来ないから教室を探しに行って」

「最初に会ったときに宗一君を担いでいった男の子に会えたから、聞いたら今日はお休みだって」

「で、何故ここに」

「なんかその男の子が住所教えてくれて風邪らしいから見舞いに行けて言ってくれて…」

あの野郎、いつか殴る。明日殴る。

そして何故俺は欠席の理由を風邪にした。数時間前の俺も殴る。いくら面倒だからって適当に理由言うなよ。

「なんか元氣そうだし、とりあえず邪魔するわよ」

「待て待て待てコラ」

「アリサちゃん、流石にそれは……」

「なに？ アンタは客を玄関で立たせ続けるの？」

いや招かれざる客だから。

半端な正論やめろ。

特にそっちの魔法少女とか肩の上のフェレットなんか問題にしかない状況出来てるんだから勘弁してくれとかマジでおい待てっ。

「ソーイチ、客か……い？」

リビングまで押し入ってきたご一行に対し、寛いだ状態で俺に問う
アルフ。

膠着。空気まで膠着。

さらに状況は悪化する。

「んにゅ……」

目をごしごしと擦りながら寝室から出てこられる寝ぼけたお嬢様。
もうどうにでもなれと俺はこれからやって来る面倒ごとと、止まらない頭痛に頭を抱えた。

第四話。(後書き)

急展開の予感。

意図しないところで最悪の出会い。

：あれ、顔合わせていきなり戦闘より出会いとしてはマシ？

なんかさくさく書けたから割と早めの更新。

次は時間かかりそう、というか書く時間ががが。

感想ご意見待ってまーす。

第五話。

さて、なんでそれぞれが固まってるか冷静に考察するか。

まず、喋ってる途中で固まったアルフ。

恐らくだけど高町やフェレットの魔力に気づいて固まったんだろう。

次いでフェイト。

まあ、寝ぼけてたけど直ぐに切り替わったらしい。

アルフと同じ理由かと。

次に高町。

恐らく相棒のフェレット君から思念通話か何かで、アルフやフェイトが魔法関係者であることを聞き停止。

…うん。いいとこ付いてる気がする。

で、なんでこちらのお嬢様二人は固まってるんでしょう。

「柚木くん？　こっちの人は…？　一人暮らしだって聞いたんだけど……」

「ああ、そういうことね」

一人暮らしだって聞いたから、他に人が居ることに驚いたと。

多分、あいつからの情報だな。

つか一人暮らしだって聞いてたからあんなグイグイ家に入ってきたわけだ。

さて、アルフとフェイトはどうするかな。

「こっちはアルフ・テストロッサ。でこっちはフェイト・テストロッサ。俺の親戚筋で、日本に旅行に来たけど

宿代がもったいないから俺に連絡してきた居候。昨日の夜突然来たから説明面倒で仮病使ったわけだ」

呼吸をするように嘘を付く。よくもまあ抜け抜けと、つか口から勝手に出てくる不思議。

アルフからは素晴らしいまでの痛い視線をいただくが、あえて含みを持たせた視線を返すことで乗るように意思を送る。

この数時間でなかなか信頼関係を気づいた俺たちはアイコンタクトに成功したようで、いい感じに乗って来てくれた。

「――そうなんだよ。ホテル代もバカになんないし、丁度ソーイチは一人暮らしで部屋も空いてるって聞いてたからね」

「なーんだ。そうだったんだ」

お嬢様二人は安堵のため息と共に肩を落とす。何に安心したかは知らん。考えるのも面倒だ。

が、魔導師組の無言の喧嘩は終わらない。

「あれ、なのはちゃん。お知り合い？」

「…ううん。何でもないの」

と、言いつつも離れない高町とフェイトの視線。

動物だから気づかれないフェレット君と、思ったより演技のうまいアルフに感謝。

だとしてもこの空気はどうにもなりそうにないので、頭を抱えてもう一度ため息をついた。

「…ああ、面倒くせえ」

——ガンッ！！！！！！

頭を殴られたような衝撃が俺に膝を付かせた。

実際は衝撃は幻覚で、誰もその立ち位置から動いていないし、魔法を使った様子も無い。

しかし、全身——それも内臓まで冷えそうな寒さに俺は身体を抱きしめる。

呼吸が辛い。海の底へ沈んでいくような悪寒、重圧感、孤独感。

何かがおかしい。そう脳は警鐘を鳴らしているが俺の身体は言うことを聞かない。

身体から力が抜け、俺の名を呼ぶ声にも答えられず、強かに頭を打ちつける。

だんだんと警鐘は強くなっていく。

何がおかしいかは分かっている。

だって。

身体を蝕むような寒さに反して。

俺の目に映る光景は、轟々と燃える一面の炎だったのだから。

S i d e F a t e T e s t a l o s s a

ガッ

鈍い音を立てて、私をここへ連れてきて無理矢理寝かせた男の子が倒れる。

え？ と少し間拔けな声が重なって、呆然とする。

不意に落ちた沈黙の中に、男の子のカタカタと歯がぶつかる音が聞こえる。

意識を戻せば視線は何処を見ているか分からないのに、身体を抱きしめて小さく丸まって震えている。

「あっ、アルフ！」

「ソーイチっ、いったいどうしたってんだい！！？」

どうしたらいいか分からなくなってアルフを呼ぶと、アルフは直ぐに駆け寄ってくれる。

そうしたら魔導師らしい女の子とその友達ふたりも電池が急に
たみたいに動き出す。

「ど、どうしたってのよっ」

「きゅーきゅーしゃ!? だれかきゅーきゅーしゃよばなきゃ!!
ひゃくじゅーななばん!」

「柚木くんっ? 柚木くん! 大丈夫!?!」

みんなもパニックになっている。

他人がパニックになるとかえって自分は安定する、なんてお話は何
で読んだんだっけ。

もしかしたら私がこの人と繋がりが少ないからかもしれないけど。

「脈は…正常。ちょっと過呼吸気味かな。寒いみたいだし…頭ぶつ
けてたし……」

少し冷静になった私は男の子の身体に触れて、様子を見してみる。

応急手当とかはリニスに習ったことがあるから少しは分かる。

でも、お医者さんに見てもらったほうがいいのは本当かもしれない。

「アルフ、そーっとベッドに寝かせてあげて」

「分かったよ」

アルフが用心深く男の子——確かソーイチってアルフは言ってたっけ——をさっきまで私が寝てた寝室に連れて行く。

その間にソーイチの友達らしい三人は落ち着いたみたい。

お医者さん呼びたいけど、私はこの近所のことを知らない。

「事情を説明して、お医者さんと呼んでもらえるかな？ 少し頭を打ったみたいだからあんまり動かせないかもしれないし

私はここに詳しくないから…」

「わ、わかったわっ」

「アリサちゃん、車呼んだよ」

「近くに総合病院があるのっ」

「ちょっと待ってなさい！」

ばたばたと三人は玄関から出て行く。
それを見て、私は一度深呼吸をした。

ふと気づけば、あの魔導師みたいな子との嫌な雰囲気は忘れ去られてた。

うやむやになったただけだろうけど、少し落ち着いた。

無理矢理だったけど、私は確かに休むことが出来たし、少し、少し

だけど…寝かしつけられたとき、安心できた。

いつの間にかアルフとも仲良くなったみたいだったし…このまま苦しんでいるのを見捨てるのは嫌だ。

——うん、嫌だ。

自分の心の中で生まれた気持ちを確認する。

とにかく、私に出来ることは多分もう無いからまずは話を合わせるためにアルフと相談しよう。

S
i
d
e

o
u
t.

夢を見ていた。

これは、夢だ。そう俺は感じている。
でもそれは違うと俺の頭は考えている。夢だと思い込みただけだと。

人は本当に嫌な記憶は奥底に封印して自分の心を守る。
そうしないと壊れてしまうほど人の精神というのは弱いから。

この感情もその一つだと俺の冷静さが訴えている。

「なんだよ……これ」

口からこぼれたそんな苦痛。
でもこれを言ったのは俺じゃなくて、男^{かこ}だ。

そう、これは記憶。

失われた前世の記憶のほんの一部。

「おい……？　——！！　起きろよっ。おい！！」

俺が抱きしめる小さな身体。

俺よりいくつか年下の女の子。

なんで、こんなことに？

知っている。それは、事故にあったから。宝くじに当たるより少ないと言われている一種の奇跡に立ち会ったから。

飛行機が途中でエンジン停止状態に陥り、墜落したから。

そして——乗客乗員すべての人間が物言わぬたんぱく質の塊になり、俺だけが生き残ったから。

「ふざけんなよ……なんだよこれ……ひでえよ……」

嗚咽。この世の理不尽に叫ぶことすら出来ない。

抱きしめた——の身体は綺麗なようで、背中から夥しい血が流れている。…即死だ。

せめてもの救いと言える。

むしろこの状態で生かされた俺の地獄。何故大切なこいつを死なせて俺だけ生きなければならぬのか。

「…ああ、面倒くせえ……」

いつもの口癖。人はおかしくなると状況にもあわない口癖が出るらしい。

まあ、ある意味では真実だ。

こんな大切な人が理不尽に死ぬ世界で、俺だけが生かされるふざけた世界で、一人生きることはこんなにも面倒くさい。

家族より、自分より、なにより大事だった――。

なんでこうなった。どうして世界は俺にこんな絶望かみさまを与える。

別にクリスチャンでもないし変な新興宗教でもない。神様なんて都合のいいときだけ信じる一般的な日本人の俺。
それでも今は神様を呪いたかった。

「あ……ああっ………あああ………っ！！」

身体に襲い掛かる打撲の痛みと、炎の熱。

大切な女の子を失った絶望。

想い人を失った孤独。

全部が俺の心を狂わせて……俺は哭ないた。

目を開くと、いつもの天井だった。

自室のベッドに仰向けに寝ているときに見える風景。

差し込む弱い夕日がまもなく日没であることを教え、誰かの寝息がこの部屋に別の人間が存在することを教えている。

自分の前世を垣間見たことでズキズキと痛む頭は、寝込むほどのものではないと判断し身体を起こす。

横を見れば、ベッドに上半身を預けるように眠るフェイトが居た。

：恐らく、俺の様子を見ていてまだ抜け切っていて居ない疲れに負けて眠ってしまったと都合のいい解釈をする。

「：起きたみたいだね、大丈夫かい？」

丁度ドアを開けたアルフ。

一瞬俺を見て目を見開いて、優しく声をかけてきた。

その質問には首肯で答える。

「お客さんがたは？」

「まだリビングだよ。医者が言うには過労じゃないかってさ。無理すんじゃないよ」

「あらら」

まあ、疲れてはいたからその理由もある意味あつてゐる。

真実を教える必要は無いけどさ。まさか前世を思い出して気を失つたなんて言えないし。

全然起きる気配の無いフェイトをもう一度ベッドに寝かせ、俺はリビングに顔を出した。

「柚木くん!？」

「起き出して大丈夫なの？」

「痛いところはない？　大丈夫？」

俺に気づくや否や、捲くし立てられる。

俺は聖徳太子じゃないので落ち着いて欲しい。

「大丈夫だ。とりあえず落ち着け」

勝手にお茶飲んだよという月村に別にいいと返す。
俺は大丈夫だというのを無理矢理納得させて、その話題を終わらせる。

「で、そういえばお嬢さん方の本来の目的は終わったのか？」

「……そういえば。結局文句言いついでに見舞いに来たんだったわね」

「そっちがついでか」

「あ、柚木くん。これがお医者様の診断書」

「サンキュ」

「それじゃ、柚木くんが疲れてるのも本当みたいだし、そろそろ帰ろうかな」

倒れちゃうくらいね。となんとなく嫌味たっぷりの月村。何故そこまで言われなきゃならん。

それもそうねと同意したバニングスが荷物をまとめ始める。もともと俺が起きたら帰るつもりだったんだとき。

「あれ、どうしたのなのは？」

「……うん、少しだけ…柚木くんに聞きたいことがあるから、残っちゃダメかな？」

「…分かったわ。あまり無理させるんじゃないわよ」

「またね。なのはちゃん、柚木くん、アルフさん」

「今度は学校で会いましょう」

さらりとお嬢様方退場。

全く隙が無かった。途中から家主であるはずの俺が口を挟めない程度には。

さらに気を利かせてくれたらしいあたりどう答えるべきか分からん。医者関係で世話になったみたいだし、お嬢様だから中途半端な礼じやダメだろうか？ 高級な菓子折り？

「柚木くん」

考えている俺に声をかける高町。
かちり、とギアを入れ替えた。

恐らくここからは非日常まほうの世界になるだろう。

「どうした、高町」

「柚木くんは、ジュエルシードを集めてるよね？」

……いきなり爆弾を投下されました。

「な、なのは！？」とフェレット君もフェレットの振りを忘れております。

どうやったらそういう答えに直結するんだろうか。

ジュエルシードの反応でもあったか？ 単に魔導師が傍にいたことがそのままだ理由か？

ここはからかう事にする。

「…ジュエルシードって、何だ？」

「ふえ？」

「宝石の種…だから原石ってことか？」

「ふえ、ふえええええ！？」

「……と、こういうことになったらどうするつもりだったんだ？」

顔を赤くしたり青くしたり、目をぐるぐる回しているのが正直に面白いです。

…おふざけはここまでにしよう。

「集めてるけど？ 何か？」

「……意地悪なの。なんで、柚木くんは集めてるのかな？」

「んー…………邪魔だから」

「え？」

「は？」

「へ？」

阿呆な声と表情を晒す高町、フェレット、アルフ。

だってさ、こんな理由くらいしか思い浮かばなかったんだよね。

未来のことを知ってて辛い思いをする人を助けたいなんてバカ正直に言えるはずないし、

それ以外になにかジュエルシードに思うところあるか、って言ったらあんな不幸の元凶邪魔だっていうくらい。

放っておけば放っておいたで悪影響しか及ぼさないものを無視するわけにもいかないし。

「まあ、ある人曰く俺はトラブルが向こうからやってくるらしいから何もしなくても巻き込まれるんだろうけど」

「ホントに、それだけ？」

「おう。あんな災害物、放っておかない理由がそれだけじゃ不満か？」

「そ、そうなんだ……」

「でもっ、あれは危険なものなんです！ 魔法の使えないあなたでは……」

「そうなんだよなあ。昨日実感したわ」

実際ギリギリだったな。

小狼さんに拳法でも習うべきか。

「でもそれはやらない理由にならないよな。やらなきゃもっと大きな規模での被害が出て結局巻き込まれるかもしれないんだから

多少なりと対応できるなら自分から首突っ込んで少しでも状況改善に尽くしたほうがまだマシだ」

「……わかりました。僕が止める権利はありません」

「ユーノ君!？」

「無茶はしないでください」

「いやまあ、俺だって男だからねえ。見知った女の子が目の前で命がけなのに無茶だからって引っ込むわけにはいかんのですよ」

「……………うん、そうだね」

何か思うところがあったのか、黙り込むフレット…否、ユーノ。それを見て高町はユーノが言いくるめられたと思ったのか目を吊り上げて立ち上がった。流石に意味が分からない。

「そんなのダメなのっ。魔法が使えない宗一くんがジュエルシードを集めるのは危ないんだよ!!」

「体験済みだって。承知の上だ」

「じゃあもうやめて! 私のお話聞いてっ」

「……この話は終わりだ。高町、お前は少し頭冷やして…そうだな、相手の立場に立って考えてみるんだな」

「知らないっ!」

「な、なのは!？」

肩を怒らせて飛び出していった。

玄関を出るときに微妙に「お邪魔しました!」と言い捨てるように聞こえたのは行儀がいいのか悪いのか。

ドアはボタン! とデカイ音を立てて閉めるし。

そういえばとさっきの驚きの声から一言も喋っていないアルフに視線を向ければ、ぽかんと固まっていた。

急な展開に追いつけなかったんだろうか。

まあ、子供によくありがちな自分が正しいと思っている意見が通らないと癇癪を起こすって奴だ。

なれてない奴はこうなるのもしかたない。

「さて、と」

時間は午後六時前。

晩飯を作るには少し早いかな。ポタージュは出来てるわけだし。
洗濯機でも回してくるか……。

第五話。(後書き)

ちょっと子供っぽいのはさん。

大事な人格形成の時期に辛い思いをしてたならこういう半端なゆがみ方もあると思います。

ちょっと大人で、少し子供。

宗一くんの過去も少し公開。

さて、この場面に何の意味があるのかな。

では、次の更新に。

感想・ご意見待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9251n/>

少しだけ、やさしい世界へ

2010年10月18日14時17分発行